

編集後記

この度、『浄土真宗総合研究』第一九号を発刊いたしました。

二〇二五（令和七）年、日本は戦後八〇年という節目の年を迎えました。宗門では、これまでの歩みを振り返り、世界の現状を見据えて、私たちの立脚点である「世の中安穩なれ、仏法ひろまれ」との宗祖親鸞聖人のお心に立ち返り、現代においてあらためて何が問われているのかを見つめ直す取り組みを進めてまいりました。平和フォーラムの開催やドキュメンタリー映画の上映などがある中で、本研究所では、「平和のために何をすべきか―戦後八〇年を迎えるにあたって」をテーマとした第十三回宗門教学会議や、「平和学、平和の教化学の確立に向けて―〈非暴力〉を視座として」というテーマのもと第十四回宗門教学会議を開催いたしました。そして、戦後八〇年という長い時間の中で点検されてきた戦争協力の実態やその問題性を整理し、「平和に関する論点整理（戦後八〇年版）」が作成、発表されたことは、念仏者の視点から平和をめぐる課題をあらためて問い直す試みとして位置づけられるものです。そこには、現実に悩み苦しむ人の力となり、互いに支え合っ

て生きていく社会への願いが込められていると言えるでしょう。

そこで今号では、戦後八〇年を機縁として、「平和と宗教」とのテーマを設定いたしました。

本研究所では、上記のような平和研究の取り組みに加え、その一環として、自死や貧困などの諸問題にも取り組んでいます。テーマ論文には、それらの成果である仏教および真宗における人間観・人間像、親鸞聖人が「御消息」に用いられた「安穩」、そして、対人支援の現場における支援・被支援の関係性の研究を収載しています。

今号の成果が、読者の皆様、そして宗門にとつて問いを深める一助となることを、編集者一同、心より願っております。

浄土真宗本願寺派総合研究所は、現在、「現代教学・課題研究関係」「伝わる伝道研究関係」および「東京支所」の体制で、それぞれの専門性を活かした研究・調査・編纂の事業を継続しています。自他共に心豊かに生きることが問われる現代において、今後もその成果を『浄土真宗総合研究』やさまざまな研修会・刊行物を通して公開してまいります。

（『浄土真宗総合研究』編集委員会）